様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１８５０３

研究課題名（和文）感性のナショナリズムとしての山岳風景論―明治文学を視座として

研究課題名（英文）The Sensibility of Nationalism in the Paintings of Mountain Scenery: A Study from the Viewpoint of Meiji Literature

研究代表者
森本　隆子（MORIMOTO, Takako）

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：５０２２００８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　ナショナリズムの形成にあって「我が郷土」とも呼べるような愛郷精神が国民全般に共有されることは不可欠である。本研究では制度としての「国家」と対立しながらも相補的なロマン主義的「郷土」意識の生成を「感性のナショナリズム」と命名し、その系譜と構造を追究した。
『日本風景論』（志賀重昂、1894）を嚆矢とする「sublime」（訳語は「跌宕」）な郷土創出のムーブメントとして島崎藤村らが提唱する「山岳小説論」、水彩画家たちによる山岳風景画のジャンルを指摘し、また「sublime」が内包するナショナリスティックな男性中心主義が夏目漱石の『虞美人草』（1907）によって批判されていることを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本近代におけるナショナリズムの生成について、「国家」研究の側面に関しては、これまで主に社会科学が大きな研究成果を挙げてきたが、国家を形成する「国民」の創出に関する人文科学の側からのアプローチはまだ緒に就いたばかりである。ナショナリズムの高揚に向けて、感受性はいかに陶冶されたか。国民が誇りを覚え、帰属を実感するような郷土意識の生成について、小説はもちろん、紀行文学や風景画が広くその裾野を開拓している構造について剔抉、解明する意義は大きい。一方で、ナショナリズムおよびナショナリズムが内包せざるをえない男性中心主義が、同じ文芸ジャンルの中から自己批判的に自覚されていく様相もまた注目に値する。

研究成果の概要（英文）：　During the formation of nationalism in a country, ”my homeland”—a collective consciousness of loving for one’s birthed soil —serves as an indispensable element for all its nationals. This study analyzes the context and structure of ”sensible nationalism”— a romanticized awareness of “homeland” that both contradicts and complements the term “nation” as an institution.
　It focuses on examining Sangaku shosetsu-ron by Shimazaki Toson, an indigenous artist movement that originated in the 1894 essay Nihon fukei-ron (An Essay on the Japanese Landscape) by Shiga Shigetaka, who used the term “sublime landscape” to conceptualize Japanese people’s homeland. It also explores the genres of mountain scenery paintings by different domestic watercolorists and discusses the critics of male-centrism— an implied nationalistic rhetoric of “sublime”— in Gubijinnso by Natsume Soseki.

研究分野：日本近代文学

キーワード：ナショナリズム　郷土　日本風景論　山岳小説論　山岳風景画　吉田博　虞美人草　ジェンダー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本近代の曙ともいうべき明治期ナショナリズムについて、国家体制に対する言わば＜反動＞として、国家と対峙しながら相補する位置にあった＜ロマン的ナショナリズム＞の研究史に一石を投じたのが 1980 年に刊行された柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社）である。とりわけ本書の機軸をなす論考「風景の発見」は、近代的＜風景＞なるものが実は政治的人間――敗北を喫した政治青年たちが一転、その拠り所を現実社会から自己の内的世界に転じた＜転倒的眼差し＞によって見出された＜内的風景＞であることを精細に論じたものである。ここに＜近代文学＞の政治的ロマン主義の大きな一翼を担う新たな一面、換言するなら＜政治と文学＞の接点は明快に提示されたと言えるが、両者の研究領域は個々に独立的であり、その後も「ナショナリズム研究」は依然として政治研究と文学研究に分断されたまま経過している。

2013 年発表の拙著『＜崇高＞と＜帝国＞の明治―夏目漱石論の射程』注①、とりわけ本書所収の「風景と感性のサブライム―志賀重昂から夏目漱石まで」は、柄谷も例示に挙げる志賀重昂『日本風景論』（1894 年）を、まずはいったん具体的な文学的著述として分析し直すことによって、ロマン主義的ナショナリズムの根拠地ともなる＜吾が郷土＞の生成のプロセスと構造を論じようとしたものである。一篇のキーワード「跌宕」がラスキン『近代画家論』(*Modern Painters,1843~1860)*の「sublime（崇高）」の特権化された訳語であることを指摘し、そのテクスト構造が形式的には優美(「beautiful（優美）」)な霊峰「富士」を＜図＞として際立たせながら、実のところは日本固有の「火山」群の危峯や危巌の「突兀」「偏奇」にして「不規律」な「跌宕」の美を＜地＞として展開したものであることを論証した。

すでに上記の拙著において、志賀的「反国家主義的ロマンチシズム」の血脈を北村透谷を接続点に、国木田独歩から伊藤佐千夫、島崎藤村へと続く所謂「自然主義」文学の系譜に見出し、一方、批判的な類縁者として夏目漱石を位置づけていたが、幸い、その後、拙著所収の『破戒』論を再度、改めて論じ直した「＜欲望＞あるいは＜病＞の表出としての『破戒』―山岳小説論を布置として」注②において、ささやかながら後続する新たな知見を得た。すなわち『破戒』執筆の背景として、小島烏水、田山花袋らとの間に「山岳小説」の構想――「峻峰高嶺」の山合いに埋もれた民たちの「ローカルカラア」を有する数奇な運命に「大和民族の特色」を発掘しようとする一大企図があったことを論証できた注③。いうまでもなく、「富士」の「優美」とその他の火山群の「跌宕」を表裏一体に展開する志賀的「郷土論」における後者――サブライムな奇想の系譜に連なる構想である。

ここに着想を得たのが今回の研究課題「感性のナショナリズムとしての山岳風景論―明治文学を視座として」である。

２．研究の目的

日本近代におけるナショナリズムの勃興期に当たる明治時代を中心に、すでに社会科学が研究成果を挙げている制度としての＜国家＞の文脈と対立、拮抗しながら、実は相補的に展開されてゆく＜吾が郷土＞を拠り所としたロマン主義的反動を＜感性のナショナリズム＞と命名して束ね直し、その系譜と構造を追究しようとするものである。

始発点に郷土論の祖とも呼ぶべき志賀重昂の『日本風景論』（1894 年）を置き、文脈設定としてはすでに拙論で提示したテクストとしての構造――「優美(beautiful)」な霊峰「富士」を近代国家・日本のシンボルとして表象し直しながら、他方、「sublime」の訳語「跌宕」をキーワードに魁夷にして不規律な火山群の奇想の美学を表裏一体的に展開する、その個性的な風景論を範型に、絵画から紀行文、小説まで、多岐にわたる文芸諸作品を対象として、近代の郷土意識が醸成されてゆく過程を追い、「郷土論の系譜」、ひいては「ロマン的ナショナリズム」の文芸作品を視座とした分析的研究を展開しようとするものである。

３．研究の方法

近代日本における＜郷土(国土)＞および＜国民＞創出のムーブメントについて、文芸ジャンルにおけるその諸相を考究するために、以下の３つの視点を設けた。

⑴　島崎藤村の「山岳小説論」を結節点に、２つの大きな水脈として、日本山岳会を率いた小島烏水に始まる登山を媒介とした「山岳紀行文」の系譜、田山花袋を頂点とする日本各地の奇勝を踏査しては紹介する「紀行文学」の系譜を設定し、材料収集、分類する。

⑵　志賀重昂を１つの典型とする近代日本における＜山の発見＞は、ヨーロッパにおける近代合理主義に対する反動を含んだ＜アルプスの発見＞の直接的な影響を受けたものであり、きわめて類比的である。媒介項として、まさに「sublime / picturesque」の美的範疇を日本へもたらしたジョン・ラスキン、そしてこのサブライム美学の圏域内にあってピクチャレスクな『湖水地方案内記』（1810 年）を以てイギリスにおけるロマン主義的な風土発見をもたらしたワーズワースの日本受容について資料の収集を図る。

⑶　サブライム美学の力学圏にありながら、その魅力に囚われつつも批判的立場に終始した夏目漱石のテクストを、その影響下に作品を構想し、「山岳小説論」の着想に至る島崎藤村らを検証するための恰好の比較検討の素材として取り上げる。

４．研究成果

「３.研究の方法」で立てた研究計画では、島崎藤村の交友圏に生成した「山岳小説論」の系譜の解明を主たるテーマとし、補助線として夏目漱石の初期テクストを考察する予定であったが、神戸大学よりシンポジウム「漱石論の現在」の登壇を依頼され、シンポ後、報告内容を活字化する機会を得たため、漱石テクストに関する検討の方を先に論考の形に整え注④、山岳小説論については現在、草稿を準備中で投稿を予定している。

⑴　「山岳小説論」の系譜に関する最大の研究成果は、日本におけるラスキン受容関連の資料の宝庫ともいうべき「ラスキン文庫」所蔵の図録を足掛かりに、「山岳風景画」とでも称すべき一群の水彩画の系譜が存在することを発見したことである。

ここまで研究対象として想定し、資料整理を進めてきた「山岳小説」「山岳紀行文」の他に、日本近代の山岳史と感受性の領域を橋渡しする有力な媒介項として「山岳風景画」のジャンルを設定することができたのは大きな成果であった。吉田博、丸山晩霞、大下藤次郎ら「山岳―渓流―高地」を求めて日本アルプスを中心に各地を旅しては絵画をものする「登山する水彩画家」の一群である。そのほとんどが「山岳風景画」のみならず、いわばセットとしてスケッチに因んだ「鑑賞記」を残している。小島烏水の創設になる「日本山岳会」の主流が日本アルプスの山々を踏破し、頂上を極めることを旨とする「登山」および「登山」をめぐる紀行文学によって占められているのに対して、山岳風景画たちの関心はあくまで画筆と言葉による「風景描写」、ひいては「風景美」への感動を表出するところにある。ここに＜風土＞としての＜国土＞が一つの纏まりを以て醸成され共有されてゆくプロセスを如実に辿ることができる。

また、これに付随するもう１つの発見は、これら一群の風景画家たちが、美術史上の分類としては、日本の西洋画壇の中心的存在となってゆく黒田清輝を領袖とする外光派の「白馬会」に対して、圧倒されながらも一派を形成した「旧派」――「太平洋画会」に属していることである。たとえば槍ヶ岳や穂高などの日本アルプスの峻厳な連山を描き続けた吉田博の「富士拾景」(1928年）を始めとする富士の風景画は、外光派を代表する和田英作の平地に安定した視点をとって画布いっぱいに優美に描き出されたオーソドックスな富士山とは全く異なり、まさに本人弁の通り「登つて、そこに無限の美を感受」注⑤することで創作された独特な写生画である。さらに、丸山晩霞と島崎藤村の交流は有名であるが、夏目漱石に『三四郎』を始め、吉田博に対する独自の共感の痕跡を見出すことが出来たのも大きな収穫であった。

山岳風景画とこれに連接する明治の作家群の連なりは、『日本風景論』を嚆矢とする志賀的ナショナリズムの＜感性・感受性の領域＞の広大な裾野を形成しているとの結論を得た。

⑵　漱石テクストにおける「サブライム」については、すでに『草枕』（1906年）を論じて、女性を絵画化しようとするピクチャレスクな欲望、そこに潜在する死を内包したサブライムな自己超越の欲望に関する考察を終えている（拙著所収、注①参照)。今回は『草枕』のテーマを引き継ぐ次作『虞美人草』（1907年）について検討を加えたが、２つの審美感の審級関係、ジェンダー偏差など、漱石がその概念をきわめて正確に認識しながら作中世界へ反映させている様相を論証することができたのは、本課題の目的からは副次的範疇に留まるものの『虞美人草』論、ひいては「サブライム」の日本近代における受容論としては意義のある成果であった。

拙論の『虞美人草』論としての骨子は、個我を押し立てようとしたヒロイン「藤尾」の「死」という結末について、昨今、その男性中心主義性には批判が加えられ、相対化がなされつつあるものの、「徳義」による「処罰」といった読みの方向性は固定されたままであるのに対し、むしろ＜制度＞として＜透明＞であろうとする近代国家システムこそがヒロインを「死」に追いやってゆくプロセスを論じ、またそこで罰される、国家システムからの余剰、逸脱としてのヒロインの「詩趣」に「ピクチャレスク」の概念が当てはめられていることを検証した。漱石と等身大の主人公「甲野」は「藤尾」と同じく国家システムの余剰を生きる者として親和的に設定されていながら、それ故にその生死に立ち入ることはできず、いわば代償行為として、事後的に「サブライム（崇高美)」を以て「藤尾」を顕彰する。テクスト末尾で倫理性を内包した哲学的概念である「サブライム」の審級によって、審美的概念にすぎない「ピクチャレスク」の表象でしかなかった「藤尾」を美しく葬り直すことは、とりもなおさず、「藤尾」が死を以て切り裂いたテクストの亀裂を修復し、改めて「藤尾」をテクスト内へ格納し直すことで、その「死」を以て終結するテクストに揺るぎない論理一貫性を保障してやる行為を意味する。

テクストは事後的に「サブライム」を到来させて形式上、本来の男性中心主義を回復するが、しかしながらすでに先立って生じてしまっているヒロインの「死」がテクストにもたらした破綻をテクスト外の論理で償うことは原理的に不可能である。テクストは漱石自らが持ち出した「サブライム」を以て、彼自身を傷つける。いわば身を以て「サブライム」の男性中心性を暴く――それが『草枕』に始まる「サブライム論」に対する漱石の決着であり、次作『三四郎』以降の漱石はサブライム美学に対して一定の距離を確保することになる。展望としては、その後の漱石から「４.⑴」で検証した近代洋画の動向、ひいては自然観そのものに対して、理解と共感は有しながらも批判のスタンスを読み取ることができるはずである。

なお、今回の研究の副産物として、漱石の一連の英文学評論について、18 世紀における「自然」の発見がピクチャレスク美学を経由してワーズワースの自然の内観へ至る道程を、本邦初の「ピクチャレスク美学史」とも称し得るほどの正確さでラフスケッチしたものであることを指

摘できる。ここまで「sublime/picturesque」を機軸として漱石テクストに志賀的ナショナリズムへの批判を考究してきたが、「自然」概念そのものをめぐる両者の拮抗関係へと検証を発展させることができればと考えている。

⑶　ナショナリズムの形成にあって、＜吾が郷土＞とも称すべき国民全般に共有される愛郷意識は不可欠であるが、その多種多様、多岐にわたる＜感受性＞の培養器の１つとして「山岳風景画」「山岳小説」のジャンルがその密接不可分な連関性も含めて存在していることを具体的に検証することができた。その中心的美意識ともいうべき「サブライム」について、これらの諸テクストからその醸成のプロセスを把握できると同時に、その決定的な男性中心主義に対する批判を、期せずして漱石の初期テクストから痛烈な自己批判の形で検証することができた。

　もう一方の翼として、今回、緒に就いたばかりではあるが、近代風景の創始者とも呼ばれる国木田独歩、その先覚者の北村透谷の風景観について、自由民権運動への傾倒と挫折が、その反動的ロマン主義の契機として機能してゆく具体相を指摘しうるものと想定しており、今後の検討に託すつもりである。

参考文献：注①　『＜崇高＞と＜帝国＞の明治―夏目漱石論の射程』（ひつじ書房、2013 年）
注②　『島崎藤村研究』第 44 号所収、2016 年
注③　田山花袋「雪の信濃」（『太陽』所収、1904 年 12 月号）
注④　本報告書「５.主な発表論文等」の項参照
注⑤　吉田博『高山の美を語る』（実業之日本社、1931 年）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 森本隆子	４．巻 55
２．論文標題 漱石のジェンダー・『虞美人草』に寄せて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『国文論叢』（神戸大学文学部国語国文学会）	６．最初と最後の頁 16-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 森本隆子
２．発表標題 漱石のジェンダー―『虞美人草』に寄せて
３．学会等名 神戸大学文学部 第30回国語国文学会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考